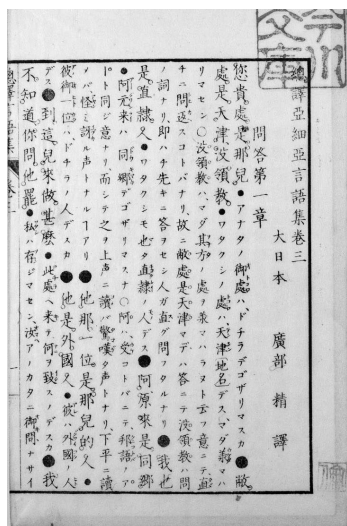


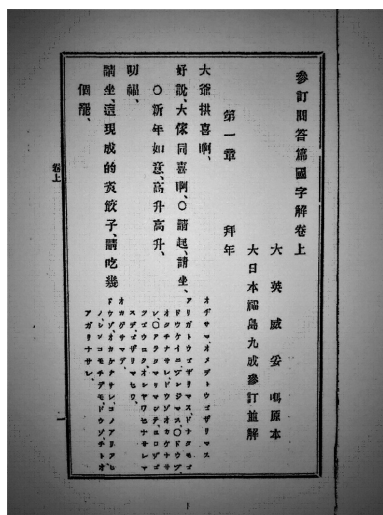
## まえがき

本書は、日清戦争以前の日本語・中国語会話集についての研究書です。日本語・中国語会話集とは、日本語とそのもとになった中国語とを対照させた会話集のことです。本文では、中国語会話書と呼びます。訳述された日本語を見ると、興味深い語や語法に気づきます。日常使われる口語で訳したとの訳述方針が示されていたり、中国語母語話者が日本語学習のために使ったという述懐がなされたりもしています。

まずは、第1部で資料について詳細に分析します。その上で、第2部では、人称代名詞について見ていきます。第3部では、戦前まで規範的ではないとされた「新シイデス」「丸イデス」のような用例が見られる点に触れます。時代を先取りしたとも言える例です。第4部では、九州方言的要素の検討を行います。



【図1】明治13年8月刊・広部精『総訳亜細言語集 卷三』：図1は、明治25年6月刊の再版本〈関西大学デジタルアーカイブより転載・掲載可〉です。実際の調査に当たっては、国会図書館蔵本〈明治13年8月刊・初版本〉の複写を取り寄せたものを使用しました。



【図2】明治13年9月刊・福島九成『参訂漢語問答篇国字解』：図2は、初版本（国会図書館蔵本・掲載可）です。実際に初版本による調査を行いました。

## 目次

まえがき	1
凡例	6
序章	7
第1部 日本語の資料として	9
第1章 『問答篇』『語言自邇集』をもとにした 『総訳亜細亜言語集』『参訂漢語問答篇国字解』の日本語	9
1 はじめに	9
2 使用資料と著者・訳述者について	10
2.1 『問答篇』『語言自邇集』とトーマス・ウェード	11
2.2 『総訳亜細亜言語集』と広部精	12
2.3 『参訂漢語問答篇国字解』と福島九成	14
3 資料の成立に関する先行研究	17
4 中国語原文改変の実態と日本語訳文の性格について	18
5 まとめと今後の課題	25
第2部 人称代名詞の有無と用法	26
第2章 明治前期から昭和前期までの中国語会話書9種における 一・二人称代名詞の直訳度	26
1 はじめに	26
2 調査資料	26
3 人称代名詞の直訳度	28
3.1 調査方法	28
3.2 中国語会話書9種における人称代名詞の直訳度	29
3.3 洋学資料および小説(会話文)の直訳度との比較	29
3.4 広部精の中国語会話書における篇別の直訳度	30

3.5 宮島大八の中国語会話書における篇別の直訳度	32
4 まとめと今後の課題	34
第3章 『総訳亜細亜言語集』における一・二人称代名詞	35
1 はじめに	35
2 『総訳亜細亜言語集』について	36
3 一・二人称代名詞について	37
3.1 一人称代名詞Ⅰ	38
3.2 一人称代名詞Ⅱ	41
3.3 二人称代名詞Ⅰ	43
3.4 二人称代名詞Ⅱ	46
4 まとめと今後の課題	47
第4章 『官話指南総訳』『東語士商叢談便覧』における 一・二人称代名詞	49
1 はじめに	49
2 『官話指南総訳』の一・二人称代名詞	50
3 『東語士商叢談便覧』の一・二人称代名詞	53
4 まとめと今後の課題	54
第3部 今につながる「です」のめばえ	55
第5章 『亜細亜言語集』『総訳亜細亜言語集』の文末における待遇表現	55
1 はじめに	55
2 中国語会話書について	55
3 『亜細亜言語集』『総訳亜細亜言語集』の訳述方針	56
3.1 成立	56
3.2 訳述の方針と傾向	57
4 文末表現から見た日本語の性格	59
4.1 「六字話」と「問答編」	59
4.2 文末における待遇表現の特徴	60

4. 3 明治初期の「です」との関わり	64	2. 4 その他の方言	100
5 まとめと今後の課題	66	3 まとめと今後の課題	101
<b>第6章 明治前期中国語会話書9種における</b>		<b>第9章 『参訂漢語問答篇国字解』における会話文中の語の解釈</b>	102
<b>助動詞「です」の用法について</b>	68	1 『参訂漢語問答篇国字解』に現れる九州方言について	102
1 はじめに	68	2 会話文中における語の解釈	103
2 明治初期の会話書と助動詞「です」	68	2. 1 ツカミホガス【抓】／ネブリホガス【舔破】	103
3 中国語会話書における助動詞「です」	70	2. 2 ズルイ【疲・懶惰】／ズルケル【疲】	106
3. 1 「活用形」別全用例数について	70	2. 3 メタタク（メタタクウチニ【一睽眼】【一転眼】）／メバタキ （メバタキモセズ【眼巴巴兒】）／メブタ【眼皮】	109
3. 2 上接語について	71	2. 4 ハシカイ【直／クチハジカイ【嘴直】	110
3. 3 下接語について	79	2. 5 チャチャクチャニスル【蹣跚】	111
4 まとめと今後の課題	81	2. 6 フトル【到大】／フトイ【大】【長大】【(高)大／ハラガフトイ【飽】・ ハラノヒク【餓】	112
<b>第4部 方言的要素の検討</b>	82	2. 7 ボシ【帽子】	112
<b>第7章 『総訳亜細亜言語集』『参訂漢語問答篇国字解』</b>		2. 8 マッキヤ（【紅】、カオヲマッキヤニナス【翻臉】）	113
<b>『語学独案内』『沖縄対話』における「に」と「へ」</b>	82	3 まとめと今後の課題	114
1 はじめに	82	<b>終章</b>	115
2 4資料の比較による分析	84	<b>中国語会話書一覧</b>	117
2. 1 用例採集に当たって	84	1 中国語会話書一覧の示し方について	117
2. 2 概観	84	2 日本語の会話文が現れている中国語会話書一覧	118
2. 3 「へ」「に」共用動詞52語の分析—資料による分類	85	3 本文が中国語文のみの中国語会話書一覧	123
2. 4 「へ」「に」共用動詞52語の分析—「使い分け」の要因	88	4 (参考)江戸時代の唐話に基づくもの	125
3 まとめと今後の課題	92	<b>参考文献</b>	126
<b>第8章 『参訂漢語問答篇国字解』と九州方言語彙</b>	93	<b>あとがき</b>	139
1 はじめに	93	<b>索引</b>	142
2 訳語の性格について	94		
2. 1 九州方言として特徴的な語	94		
2. 2 九州方言であるとともに他の地域にも見られる語	96		
2. 3 辞書に記載のない語	99		

## 凡 例

- 一、本書全体を横書きに統一した。
- 一、注は脚注によって示した。
- 一、引用は原文どおりとすることを旨とした。誤字である可能性が考えられる例も修正はせず、「ママ」あるいは「原文のまま」という注記を付して示した。
- 一、原文の漢字字体は、いわゆる旧字体のほか様々な字体が現れている。引用に際しては、できる限り日本における現行の通行字体に統一した。ただし、第1部第1章のように、漢字字体の違いをも手がかりとして影響関係を考察するところでは、できる限りもとの字体（旧字体、中国における当時の通行字体）で示し、異体字にも十分配慮した。
- 一、引用に際しては、原文の仮名表記に従った。平仮名、片仮名の違いも原文どおりとした。仮名遣いも歴史的仮名遣いあるいは現代仮名遣いに統一することはしなかった。ただし、二字分の踊り字や合字は現行の仮名に改めた。
- 一、原文に振り仮名がある場合の引用の仕方は、振り仮名を漢字の後に（ ）を用いて「兄弟（ワタクシ）」のように統一した。
- 一、本文中の引用文献は、原則として雑誌論文等初出のものを示した。初出論文は後に論文集や単行本に収められることがある。内容については、ほぼ同じものから大幅に書き換えられているものまでさまざまである。参考文献欄には、気づいた限り単行本も載せるようにした。

## 序 章

中国語関係書は、六角（2001）によると、明治元（1868）年の前年から昭和20（1945）年までに1474点、昭和21（1946）年から平成12（2000）年までに1145点、計2619点著されている。これらは、「学習書」「時文・尺牘」「語彙・辞典」等に細分することができる。実際に資料を見てみると、さまざまな日本語が使われていることに気づいた。これらの資料が中国語学や中国語教育史の分野だけでなく、日本語学や日本語教育史の分野でも使えないだろうかというところが、そもそもの出発点である。その中でも特に、日本語が現れる日本語・中国語会話集（中国語会話書）について、日本語学や日本語教育史の分野での位置付けを考察することが大きな目的である。

扱う時期は、日清戦争以前の明治初期とした。これにはふたつの理由がある。まず、この時期は今につながる日本語が形成されつつある時期であり、さまざまなジャンルの日本語の様相を把握しておくことは重要であると考えたからである。もうひとつの理由は、明治21（1888）年くらいまでで資料が途絶え、日清戦争とこれに連なる朝鮮での出来事が起こる明治27（1894）年から資料が増え出すという資料の区切りがあるからである（本書「中国語会話書一覧」参照）。

中心となる資料は、明治12（1879）年から明治15（1882）年までに刊行された広部精の『亜細亜言語集』『総訳亜細亜言語集』と福島九成の『参訂漢語問答篇国字解』である。これらの資料は、トーマス・ウェードの著作『問答篇』（1860）『語言自邇集』（1867）の訳述であるのだが、日本語の文、日本語の発想をもとに中国語を改変したと考えられる部分も見られる。どのような日本語が反映されているかを知る手がかりとして、訳述者の背景も調べた。訳述方針を見ると、日常使われる口語で訳したとの記述がある。また、中国語母語話者が日本語学習のために使ったという述懐もなされている。漢字等の母語の知識が正の転移として活用できる中国語母語話者への日本語教育を考える上で、洋学資料・洋学会話書とは趣を異にした重要な資料であることが窺える。

第1部第1章の「學清語」に実際の会話例を示したが、このような場面は、同時期の小説等にはなかなか現れていない。このほかにも外交交渉や後の戦時

を想定した会話等も日本語・中国語会話集を用いなければ解明できないものであり、当時の多様性のある日本語を考える上で、日本語・中国語会話集は必要不可欠な資料であると言える。第2部では人称代名詞を扱い、洋学資料や小説との比較で「直訳度」が異なる点を指摘する。第4部では方言的要素について、会話文の中での九州方言語彙の用法を中国語との対照を通して見ていく。このような側面からは、従来の小説や洋学資料を用いた研究成果を補強、補足できると言えよう。

第3部では、今につながる「です」のめばえについて扱う。『参訂漢語問答篇国字解』は「ましてござる」を多用する一方で、『総訳亜細亜言語集』等では「です」が多く現れている。第6章では、明治11(1878)年から明治21(1888)年までに著された9種の日本語・中国語会話集に用いられる「です」を分析することにした。今では、ですます体という言葉があるように、丁寧な言い方に「です」を使うのは当たり前になっている。ただ、本書で扱う時期は、必ずしもそうではなかった。「です」の上接語を分析すると、「スルデス」「ナルデス」「ユクデシタ」のような動詞直接形が11例現れていた。一方、「スルノデス」「オメニカカルノデシタ」のように準体助詞「の」を介する例が131例現れている。「深イデス」「メンドクサイデス」のような形容詞直接形は13例現れていた。一方、「早イノデス」「ヨイノデス」のように準体助詞「の」を介する例が30例現れている。これらは、松村(1990)による明治初年の洋学会話書の傾向と重なる部分と重ならない部分がある。小説や規範性を備えた教科書の類とも傾向を異にしている。形容詞直接形は形容詞丁寧表現の一種であり、規範的に認められるようになるのは戦後になってからであり、規範性を重視する内地の国定読本にはほとんど現れない。日本語・中国語会話集には、会話であるという点や口語で訳そうと意図した点から見ても、変化を先取りした用例が現れやすい下地がありそうである。

以上、日本語学や日本語教育史の分野、ひいては、一般社会に貢献できる点を述べた。本書で分析した「です」や人称代名詞、方言的要素のほかにも、『参訂漢語問答篇国字解』には「イッサクサクバン」(一昨昨晚)というような文献に現れる古い方の例ではないかと思われる漢語が見られる。このような漢語の問題や振り仮名の問題等今後さらに解明できる余地も残されている。

## 第1部

### 日本語の資料として

#### 第1章

『問答篇』『語言自邇集』をもとにした  
『総訳亜細亜言語集』『参訂漢語問答篇国字解』の日本語

#### 1 はじめに

主に日本語学の立場から、『問答篇』・『語言自邇集』をもとにした中国語会話書である『総訳亜細亜言語集』および『参訂漢語問答篇国字解』を取り上げる。このふたつの資料については、園田(1998a)で、助動詞「です」が『総訳亜細亜言語集』に1040例、『参訂漢語問答篇国字解』に12例現れること等を示した。園田(1998b)では、『総訳亜細亜言語集』と『参訂漢語問答篇国字解』の日本語および中国語の対応例についても論じた。

ただ、最近になって、これらの成立が今まで以上に詳しく分かってきたので、最新の成果を踏まえた上で、あらためて、日本語が現れる日本語資料として、どのように捉えたらよいかを考察したい。

その際、下記の点が重要になる。

- (1) 日本語訳文がもとにした中国語原文は何か。
- (2) 日本語訳文を作る際に中国語原文をどのように改変したのか。
- (3) 改変があった場合、日本語訳文が原文で、改変された中国語文は中国語訳文というふうには考えられないか。
- (4) 序や訳述方針の記述と実際の訳述が合致しているか。

以上を考えながら、冒頭に現れる「學清語」(中国語を学ぶ、中国語の教えを請う)という1章分を全て比べて見ることによって、どのような資料であるか